

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。(児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など)	【教師アンケート】 「児童が主体的に児童会活動に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が、 A: 80%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満 【児童アンケート】 「4～6年『児童会活動の取組に前向きにさんかできた。』5～6年『まわりのことを考えて行動し、みんなで協力し合ってねばり強くがんばれた』と肯定的に回答する児童の割合が、 A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師】 A 100% 【児童】 B 87.2%	教師アンケートと児童アンケートに大きな差があった。教師からの働きかけは十分であった。児童にとっては児童会目標が複数あり、達成することが難しかったようだ。	後期の活動を考える際には、児童会目標の特にどこに焦点を当てるのかを考慮し活動企画、実行するようサポートする。また児童が参加したり、振り返りをしたりする際には、児童会目標の特にどの部分を目標にしているのかを全校で共通理解してから行うように声掛けをし活動に参加できた！「目標を達成できた！」と達成感をもてるようにする。来年度児童会目標を考えると、児童の思いを大切にしながらも、全校児童が分かりやすいような簡潔な目標にできるようにサポートする。	特になし	【教師】 A 100% 【児童】 A 90.3%	前期より児童の評価が上がった。後期には、4～6年生がお出でを出し、1～3年生が遊びに来る和気フス、委員会では、体育委員会の紙飛行機大会、ドッジボール大会、放送委員会の「リクエスト」、運営委員会の「赤い羽根の募金など、全校児童が参加できた！」「目標を達成できた！」と達成感をもてるようにする。来年度児童会目標を考えると、児童の思いを大切にしながらも、全校児童が分かりやすいような簡潔な目標にできるようにサポートしていきたい。
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫することで道徳的価値の理解を深め、実生活へ生かそうとする態度を育てる。	【達成度指標】 児童の振り返りに、目指す姿に向けた姿が見られる。	【教師アンケート】 「道徳の価値を自分ごととして考え深められるような手立てや工夫を行うことができた」とする教師の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満 【児童アンケート】 「道徳の授業の中で自分ごととして考えることができた」と肯定的に回答する児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	【教師】 A 100% 【児童】 A 90.4%	◎教職員は、自分事として考えられるような授業展開及び終末の指導を心がけ、工夫していることがうかがえる。 ・ほとんどの児童が、どのような資料でも自分事としてとらえている。	今後も引き続き児童が自分事として道徳的価値を理解できるような授業展開及び終末の工夫を行っていく。		【教師】 A 100% 【児童】 A 92.2%	前期より自分事としてとらえてどうするよめが考えていた児童の割合が上がった。教師側の授業改善および、心の教育プログラムを義務・Sと連携したことでその評価につながったと思われる。特に心の教育プログラムを来年度公開日や授業参観に行ったことで、家庭との連携もとれ、内容も実際に合った協働であったことで児童はより自分事として考えていたように思われる。
		【校内支援体制の充実】 いじめ、不登校の未然防止のため、校内支援体制や教育相談、児童理解の会を充実させ、専門組織との連携に努める。	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や各主任が連携・協働し、諸課題の未然防止・早期解決に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、月に一回程度児童理解の会を設け、諸課題の未然防止・早期解決に努めている」と肯定的に回答する教師が、 A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	【教師】 A 100%	教員アンケートの結果から、全ての教員が情報交換の重要性を理解し、児童理解の会を評価していることが明らかになった。また、軽微な課題も課題解決にまで繋がっていないかは不透明である。単なる情報共有で終わらず、個別の課題や課題を通して具体的な手立てを練ることが今後の課題となる。教員一人ひとりが「自分事」として関わる体制を整える必要がある。	個別の支援計画を持つ児童については、4～5月に支援会議を必ず開催し、全職員が連携し対応にあたる。また、軽微な課題を抱える児童についても、夏に支援会議を設け、具体的な役割分担を明確にする。これにより、情報共有が終わっても、学校全体で課題解決に取り組む体制を強化する。さらに、保護者との連携を密にし、家庭での課題にも共感的に受け止め対応に当たる。		【教師】 A 100%	支援会議や月に一回の児童理解を確実にし、児童の抱える課題を全職員で共有することができた。今後は、軽微な課題も課題を安全・確実に共有し必要がある。そのためフォーラムを作成したことで今後児童理解で共有する場を計画している。
4	豊かな身体性の育成	【体力向上の工夫】 体力アップ(校)プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	【成果指標】 運動能力テストなどの機会を利用し、3年生以上の4クラスで上体起こしの記録を取る。そして、12月に再び4クラスで上体起こしの記録を取る。その記録が各学年とも2回以上伸びるようにする。	【各種教育データ】 上体起こしの伸びが2回以上になった学年が A: 4学年 B: 3学年 C: 2学年 D: 1学年以下	【教師】 A 100%	運動能力テストなどの機会を利用して3年生以上の4クラスで上体起こしの記録を取った。平均は、3年生17.5回、4年生18.4回、5年生15.6回、6年生17.8回だった。	2学期の体育などの中で、工夫を取り組み、上体起こしの伸びが平均で2回以上になるようにした。	特になし	B	12月に測定した平均は、3年生18.0回4年生20.7回5年生18.7回6年生21.9回だった。どの学年も伸びているが、2回以上伸びたのは、4、5、6年の3学年であった。今年度の取り組みの成果が出たと言える。
		【生活習慣の確立】 基本的な生活習慣の確立とメディア利用も含めたデジタルシナシンプ教育の推進に努める。	【成果指標】 「よいねむり(寝起きがよい)寝つきがよい、中途覚醒がない」ができていない児童の割合を80%以上にする。	【生活アンケート】 「よいねむり(寝起きがよい)寝つきがよい、中途覚醒がない」ができていない児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満 【保護者アンケート】 8時間以上の睡眠時間(低:8時間、高:8時間)を週に4日以上とすることを心がけていると回答する保護者の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	【アンケート】 A 82.9% 【保護者】 B 86.7%	3～6年児童対象の生活アンケートの結果、よいねむり(寝起きがよい)寝つきがよい、中途覚醒がないができていない児童は82.9%だった。就寝時刻、起床時刻、睡眠時間については、目標をクリアしている児童が8割前後いるが、デジタル機器の利用については、2時間より長い児童が平日51%、休日70%あり、休日は1日中利用している児童もいる。保護者からは、「大人が使っている子供に使いたが、大人向けの取組もあると良いという声もあり、保護者も問題意識を持っていることがわかった。	夏休み最終週に、「生活習慣見直しシート」の取組を行い、家庭でデジタル機器利用のルールの見直しと実行、振り返りを行う。 2学期のアンケートでは、休憩時間、連続使用時間、家庭のルールや気をつけていること等について調査し、結果をほけんだけで知らせる。2月の学校保健委員会、デジタル・シナシンプについて児童・保護者に啓発する。		【アンケート】 B 79.5% 【保護者】 A 92.2%	3～6年児童対象の生活アンケートの結果、よいねむり(寝起きがよい)寝つきがよい、中途覚醒がないができていない児童は79.5%で、前期より寝起きがよい寝つきの児童の割合がそれぞれ約5%下がった。寝起きと寝つきに関係する項目を分析した結果、どちらも平日と休日の起床時刻の差、デジタル機器の利用時間、就寝時刻が関係していると示唆された。2月の学校保健委員会では、この結果を活用し、生活習慣やデジタル機器との上手な付き合い方について親子で考えられるよう働きかけしていきたい。
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとのことを知り、ふるさとを愛を育む「ふるさと教育」を推進する。	【努力指標】 地域教材(人材等)地域の特色を生かして、学校運営協議会と連携しながら、ふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート】 「地域教材(人材等)地域の特色を生かした教育活動を行った」と回答する教師の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満 【児童アンケート】 「生活科・総合や地域の方との学習を通してふるさとが好き」と回答する児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 60%未満	【教師】 A 100% 【児童】 A 96.2%	前期は、全校で虚空蔵山ウオーキング、ふれあい活動(高学年)で竹細工、国語本読、ゴルフ体験など地域の自然や伝統文化を生かした取組ができた。そのほかにもクラブ活動や読み聞かせなど学校運営協議会や地域、保護者の力を巻き込んで充実した活動となっている。児童の満足度も高く、和気秋下の良さに気づける貴重な機会になっている。	後期は、低学年のふれあい活動が計画されている。地域の力に講師になってほしいという声、内容の見直しなども、講師の運営が継続できてきている。CSや学校運営協議会と話し合いながら持続可能な活動を探していきたい。	特になし	【教師】 A 92.3% 【児童】 A 96.1%	地域の教育力(CS、SSS、学習サポート)の力、様々な地域の方の支援に協力のもと、地域を題材にした様々な教育活動を展開することができている。持続可能な活動として新たな題材の発掘や人材の確保を行いながら、「ふるさと愛」を育む活動を進めている。
		【家庭との連携】 家庭と連携し、よりよい生活習慣の確立や家庭学習の習慣化を図る。	【努力指標】 児童が継続的に家庭学習に取り組んでいる。	【児童アンケート】 「毎日の宿題を家でしている」と肯定的に回答する児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満 【保護者アンケート】 「子どもは家(学習)で家庭学習(宿題)に取り組んでいる」と肯定的に回答する保護者の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	【児童】 A 91.7% 【保護者】 A 91.1%	児童・保護者アンケートともに肯定的な回答が9割以上だった。日常的に宿題をしていることで、家庭学習の習慣化には繋がっていることが窺えた。しかし、実際には家庭学習が習慣化していない児童もあり、そうした児童への働きかけも必要である。	学力向上に繋がらぬ宿題の内容、量の検討・家庭学習が習慣化していない児童への声かけ		【児童】 A 90.9% 【保護者】 A 91.1%	アンケート結果を見ると、児童の結果はやや減速であるものの、概ね前期と同様の結果だった。今後は、家庭学習がまだ習慣化していない一定数の児童への更なる声かけが必要。 また、別のアンケートで本校児童の家庭学習時間を短くしていることもわかってきた。学力の定着とも関連するため、今後は家庭学習・宿題の量についても検討していきたい。